

研究の成果と課題（令和7年11月現在）

令和5・6・7年度 福岡県重点課題研究指定事業（課題Ⅰ「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を図る学習指導）の指定を受け、3つの視点をもとに、研究を進めてきた。11月の最終報告会に向けて、現時点における成果と課題について報告する。

視点1

ICTを活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を図るカリキュラム（年間指導計画と単元計画）の作成と実施について

令和5年度は、国語や算数での学習場面を中心に、ICTを活用して問題に取り組んだり発表したりすることができた。また、交流の場面においても、ICTの共有機能を使って自分の考えを送ることで、自他の考えを交流したり、比較したりすることができた。

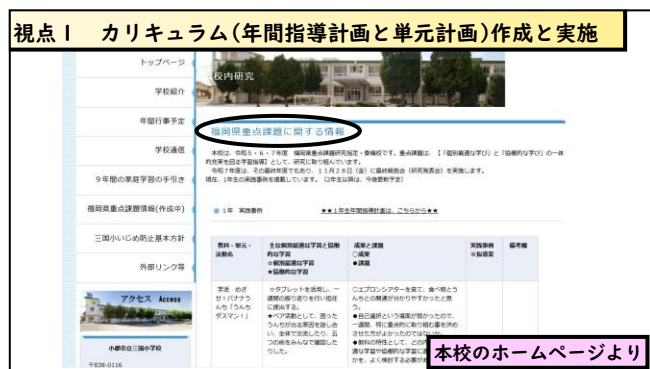
令和6年度は、さらに教科を全教科、全領域に広げて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を図るためのカリキュラム作成に取り組み、実践した取組を実践事例としてまとめ、本校のホームページにおいてカリキュラムと合わせて公開した（図1）。

令和7年度は、さらに「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実の場面を「つなぎタイム」と称し、自分（またはグループ）の課題に応じた選択（内容選択、方法選択）場面において、「自己調整力」を働かせながら、「一人で」、「友達と一緒に」、「教師に尋ねながら」取り組んでいる子どもの姿が、同時に進行するととらえて取り組んでいる（図2）。

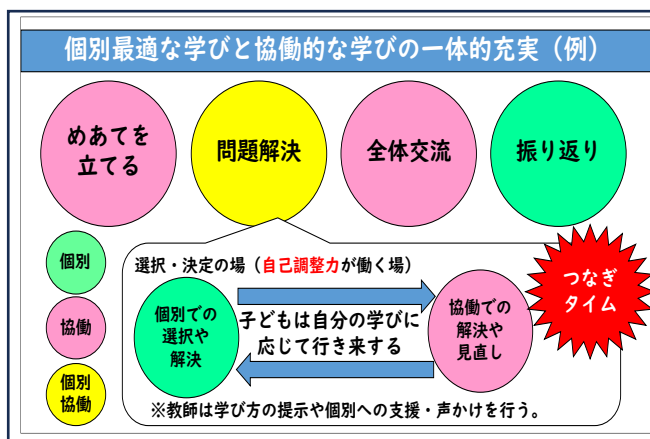
資料1は、令和7年度実施の第5学年対象の福岡県学力調査の質問紙の結果をまとめたグラフである。自分の状況に合わせ学習を進める力や、計画的に学習に取り組む力などにおいて、県や市よりも肯定的に答えた子どもの数が多いことが分かる。

このことから、自己選択・自己決定の手立てをこれまで仕組んできたことで、子どもの自己調整力が発揮されるようになってきたと考えられる。

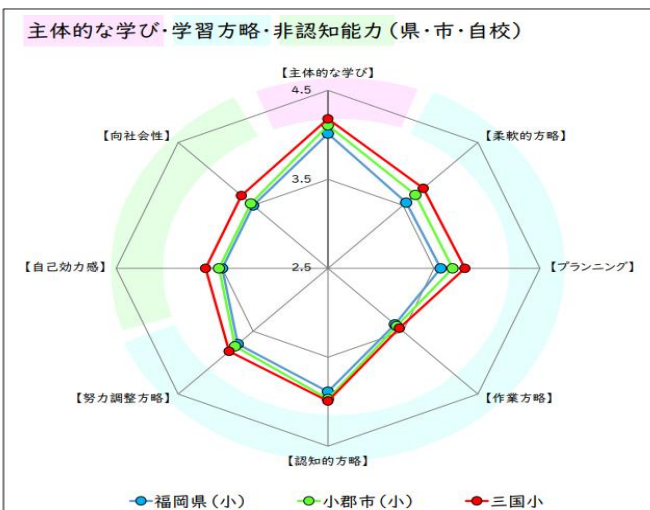
今後は、学校全体の経年変化について、12月になって実施する子どもへのアンケートの結果をもとに分析し、まとめていきたい。



【図1 三国小学校ホームページ】



【図2 つなぎタイム（自己選択・自己決定の場）】



【資料1 令和7年度福岡県学力調査質問紙より】

視点2

MEXCBTの活用による指導と評価の一体化を図る授業づくりについて

令和5年度は、授業のまとめ・単元末やテストが早く終わった子どもの空いた時間、また長期休業中や休日の家庭学習を中心として MEXCBT を活用した。（取組事例は、文科省のホームページにて公開中）

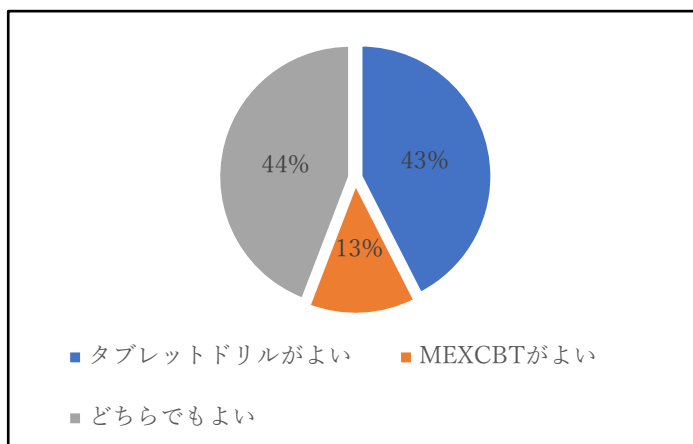
令和6年度も同様に、夏休みの課題等で、教師から MEXCBT の問題を指定して一斉に活用してきたが、活用が進まないという課題が見られた。

そこで、令和7年度は、タブレットによる問題の選択場面において、自己決定、自己選択の観点も取り入れ、子どもがタブレットドリルと MEXCBT のいずれかを選択して、学習に取り組んでよいことにした。

その後、活用状況を調べるために、今年の10月に高学年の子どもを対象に、タブレットドリルと MEXCBT の使用状況についてのアンケートを実施した。

タブレットドリルとは、小郡市が今年度、全ての小学校に一括して導入した市販の子ども向けのタブレット用のドリル教材であり、算数のドリル教材が採用された。

アンケートに回答した高学年の子ども 228 名のうち、タブレットドリル、MEXCBT の両方とも活用した子ども 120 名に対して、さらに、「授業や宿題、自主学習で活用するとしたら、MEXCBT とタブレットドリルではどちらの方がよいですか。」という設問を設けた。その結果、「タブレットドリルがよい」と答えた子どもは 51 名、「MEXCBT がよい」と答えた子どもは 16 名、「どちらでもよい」と答えた子どもは 53 名だった。上記のグラフはその割合であり、下の図は、その主な理由である（資料2、表1）。



【資料2 タブレットドリルと MEXCBT の比較】

選んだもの	主な理由
◎タブレットドリルがよい (51名)	<ul style="list-style-type: none">・ゲーム感覚で勉強ができるから。・タブレットドリルのほうが、スペースが多くて書きやすい。・タブレットドリルのほうが、覚えやすくて楽しいから。・MEXCBT は、時間制限されるから嫌だけど、タブレットドリルはじっくりと考えられるから。・MEXCBT は、問題が長いと回答欄が下のほうになるため、問題を見ながら回答を考えることができないから。・MEXCBT は解説がないし、ただ丸付けをするだけだから、なんで間違えたのかよく分からないから。
◎MEXCBT がよい (16名)	<ul style="list-style-type: none">・MEXCBT のほうが、勉強している感じ（ゲームじゃない感じ）がするから。・課題がしっかりしているから。・MEXCBT のほうが、算数、国語、理科、社会もあるから。
○タブレットドリル、 MEXCBT のどちらでも よい (53名)	<ul style="list-style-type: none">・MEXCBT もタブレットドリルも勉強に役立つから。・どちらも学習内容が復習しやすいから。・どちらも問題の難しさは一緒だし、使いやすさでも変わらないから。

【表1 タブレットドリルと MEXCBT について、選んだものと主な理由】

主な理由からも分かるように、市販のタブレットドリルは、ゲーム性を取り入れ、興味・関心をもたせながら、継続して取り組むことができるような工夫がされており、飽きなく学習に取り組めるように工夫されている。

一方、MEXCBT は、遊びの要素は少ないが、逆にゲーム性がないほうが学習に集中して取り組めると感じている子どもも一定数いる。また、市販のタブレットドリルは、金銭的にも高価であり、導入にあたり、教科が限定されるという課題があるが、MEXCBT は実質無料であり、幅広い教科（プログラミングも含む）を活用できるよさがある。

タブレットドリル、MEXCBT のどちらでもよいと感じた子どもの多くが、どちらを活用しても、「勉強に役立つから」とか、「学習内容が復習しやすいから」と答えている。

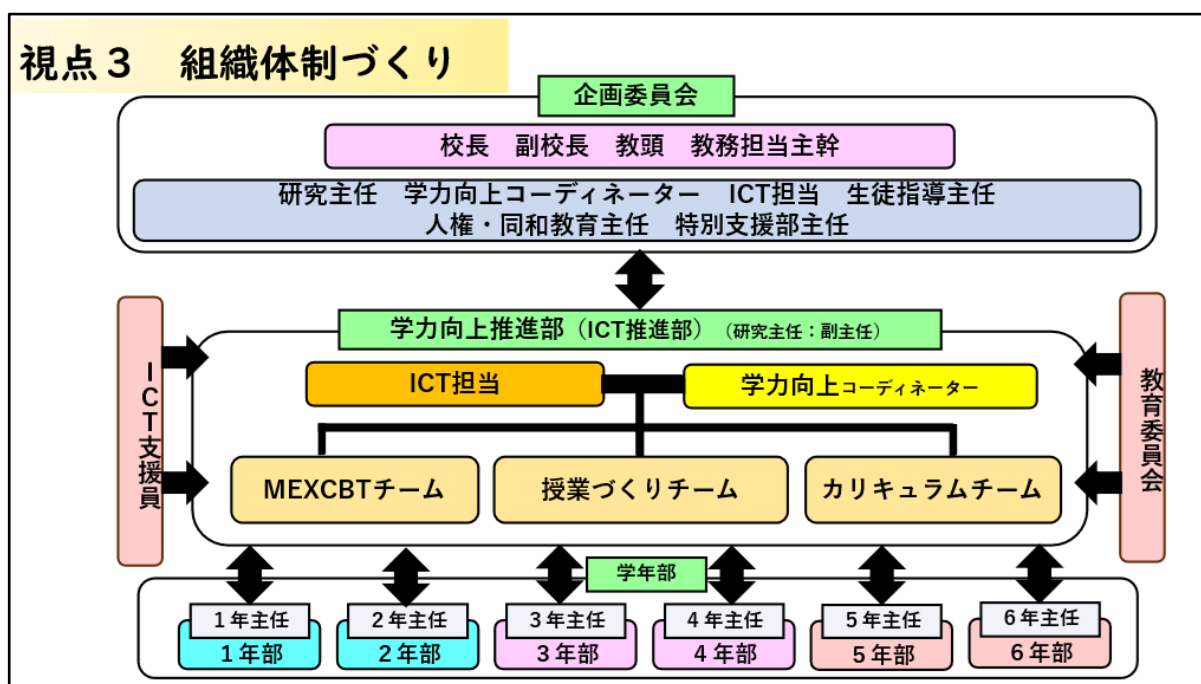
このことから、子どもにとっては、自分自身に合ったやり方で自己選択・自己選択し、課題解決に取り組もうとしていることが明らかとなった。今後は、中学年にも実態把握を広げていくことが課題となる。

視点3

学習指導の ICT 化を推進する組織体制づくりについて

令和5年度は、学力向上推進部と ICT 推進部の2つの推進部会があったため、一緒に部会を開いたり、効果的な ICT 活用の視点を明確にしたりして、ICT を効果的に活用した授業づくりを行った。

令和6年度は、さらに機能的に推進が行われるようにするために、2つの推進部を合わせて、学力向上推進部とし、更に以下のような組織図を作成して、学力向上部内に3つのチームを形成した。その結果、それぞれのチームが主となって PDCA を回すことができるようになってきた（図3）。



【図3 学力向上推進部の組織体制】

令和7年度も、引き続き3つのチームを形成して組織を編成した。推進部会においては、それぞれのチームで話し合うことや、主題研究の際に提案することを、予め学力向上推進部員に伝えておいた（表2）。

そうすることで、各チーム長が、次回の推進部会で話し合うことの内容が明らかとなり、推進部会では見通しをもって、話し合いを進める姿が見られた（資料3、写真1、写真2）。

学力向上推進部会の流れ（例）

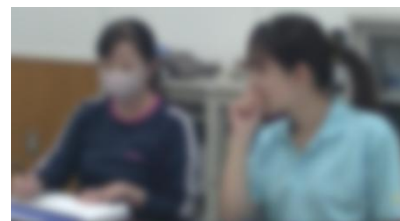
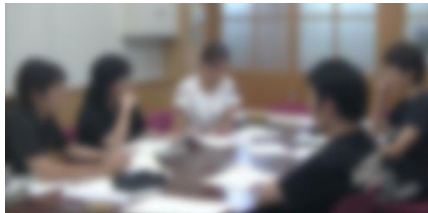
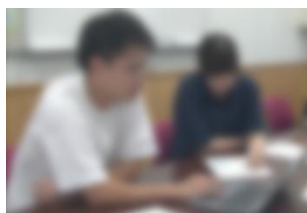
- ① 各チーム毎の話し合い （5分）
- ② 各チームからの報告 （5分）
- ③ 推進部全体での確認 （20分）
- ④ 次回主題研修について （10分）

【資料3 学力向上推進部会（例）】

しかし、各チーム毎に話し合う時間を確保することが難しいという課題があった。

日程	研修内容		MEXCBT	授業づくり	カリキュラム
9/10 (水)	推進部会 16:00～	前回提案の残り 各チーム学年の進捗など ※全国学テ分析提案	進捗状況 確認	進捗状況 確認	進捗状況 確認
9/17 (水)		指導案メ切（放課後までに） ※指導案審議のため			
9/24 (水)	16:00～	1年、5年指導案審議 （指導主事来校）			
9/25 (木)	主題研修 16:00～	2年指導案審議 （指導主事来校）			
9/26 (金)	16:00～	3年、4年、6年、特支 指導案審議（指導主事来校）			
10/7 (火)		指導案修正（放課後までに） ※指導主事の指導を受けて			
10/8 (水)	推進部会 16:00～	各チームによる確認 提案内容（つながりタイム）等の確認	MEXCBT 活 用状況に ついて	つながり タイムに ついて	事例集に ついて
10/9 (木)	主題研修 15:50～ 16:40	紀要関係（つながりタイム）の確認・ 事例集等作成について	今後の MEXCBT 活 用に関する 提案	つながり タイムに ついて（確 認）提案	事例集枠 提案

【表2 学力向上推進部会 主題研修スケジュール（一部抜粋）】

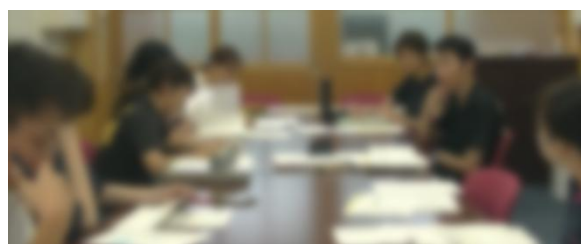


【写真1 各チームでの話し合い（10/8） 左より「MEXCBT チーム」、「授業づくりチーム」、「カリキュラムチーム」】

また、各チームでの話し合いの後は、各チームで話し合った内容を推進部会内で共有した。（写真2）

翌日の主題研修においては、各チーム長が、それぞれ提案を行い、教職員全体で共有する場面が見られた。

このように、各チームの話し合いの時間を推進部内に設け、学力向上推進部員全員で共有することで、それぞれのチームの進捗状況を把握でき、その後、学校職員で共有することができ、研究主任を中心に組織的取組につなげることができた。今後は、チームで取り組んだことをロードマップに付加していくことが課題である。



【写真2 各チームからの報告（10/8）】